

洋画家

野崎 謙

KEN NOZAKI

その人が生きて^{あかし}証として
溢れんばかりの生命力を
キャンバスに残す。

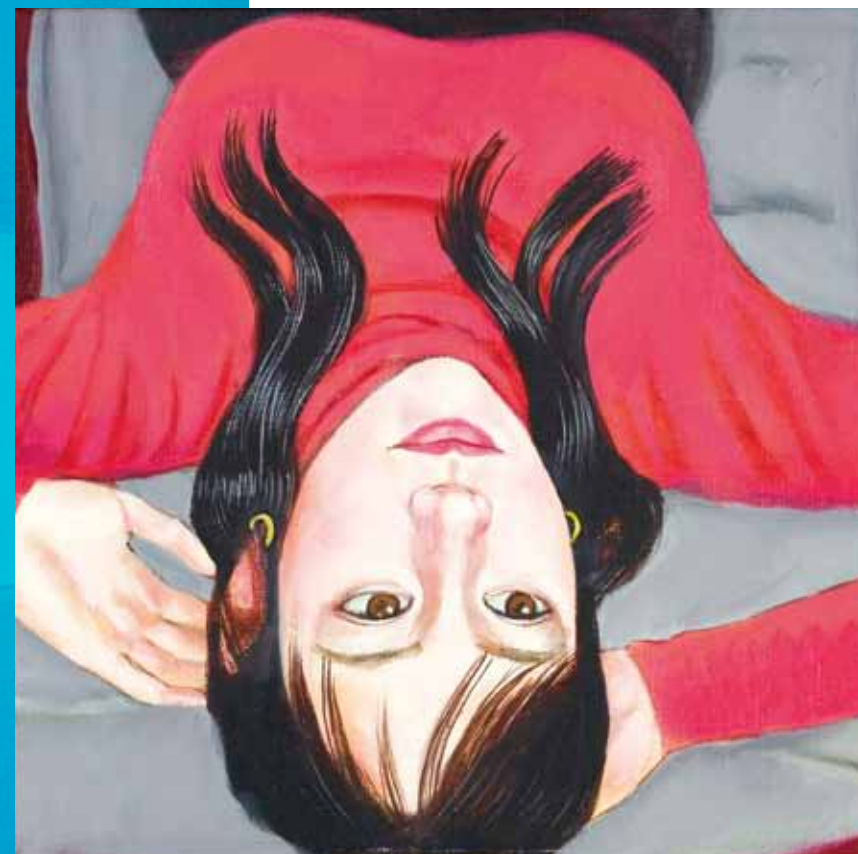


Mari
40.0 x 57.0 cm
木炭、紙 / 1994

今から24年前の1995(平成7)年1月17日午前5時46分、淡路

島北部を震源とするマグニチュード7.2の地震が発生した。阪神・淡路大震災である。この地震により兵庫県の一部で震度6を観測。京都や滋賀で震度5、大阪、和歌山では震度4を観測するなど、東北から九州にかけて多くの人々が揺れを感じた大地震だ。その死者6434名、行方不明者3名、負傷者は4万3792名と被害も甚大であった(総務省消防庁の統計より)。

大震災から遡ること2年前、洋画家・野崎謙は、一枚の木炭デッサン画を描き上げた。外見の美しさだけでなく、内面の凛とした気品までも表現した肖像画。上に掲げた『Mari』がそれだ。このデッサンで「人の姿が、最も良く自然を表わしている」ことを再認識した彼は、その発展形とも言える油彩画を描き始めた。野崎の代名詞とも言える人物画シリーズ「人形画」の誕生だ。人形画は、単なる肖像画ではない。マー



Rの肖像
33.4 x 33.4 cm / 油彩、キャンバス
2008

ク・ロスコやフランク・ステラなど、若い頃に傾倒していた現代美術的な平面性とイリュージョンを背景に、ドミニク・アングルやジャック・ルイ・ダヴィッドといった新古典主義的な人物を配した作品を指す。実はそこには、10代後半から野崎が親しんできた「神戸モダン」のエッセンスも隠れている。お洒落な港町・神戸らしいモダンな文脈の中で育った女性、例えば小磯良平作品のモデルとなるような女性を描きたかったのだ。

長年、兵庫県を中心に活動を続けてきた野崎は、阪神・淡路大震災の被災者。自らが被害を蒙っただけでなく、知人が亡くなるという悲しみも経験した。その中には、造形の学校で絵を教えた18、19歳の女性もいる。今から花開こうとしていた教え子たちの無念を思い、震災後、野崎はさらに人形画に力を入れた。人間の生命力を絵に残すことで、それぞれの人が持つ尊厳を示そうとしたのだ。